

# 故郷の父

私の故郷は石州であるが、東京に出てから彼れ是れもう二十餘年になる。其のあひだ、母の死んだ時の外は、一度もしみくと歸省したことが無い。従つて故郷の記憶も、大かたは遠い淡い夢のやうになつて了つた。たゞ所々馬鹿に際立つてはつきり想ひ出せる部分がある。

私の十ばかりの頃は、一家が久佐といふ田舎に住んでゐた。家は、四五十坪ばかりの前庭を取つて、藝州境への小街道に沿うた瓦葺の一軒家で、後は深い豁谷になり、そこから可なり水嵩のある小川が横手をめぐつて流れてゐる。街道といつても人通りは極めて稀であるが、其の道を挟んで、向うには青田が横がり、其の向うは又山になつてゐる。

或る夏の夕暮であつた。夕食を済ませた後、家内中前の縁側に出て涼んでゐると、何處からか蝙蝠が一足飛んで来て、軒のあたりを高く低く飛び廻る。私や二人の弟やも、總立ちになつて騒ぎ出した。すると、今まで晩酌の微酔顔をわざとむづかしさうにして煙草盆を前に控

へ、煙を吹かして居た父が、だしぬけに立ち上つて、長押に懸けてあつた檜の丸扱の一間棒を小腋にかゝへ、尻端折で跣足で飛び下りた。びつくりして見てみると、父は撃剣をやるやうな身構へと、氣合をかけるやうな掛聲とで、頻りに其の棒を扱いたり、水車のやうにくるく廻したり、門の恰好に構へたりしながら、蝙蝠を相手に棒使ひを始めた。棒と撃剣とは父がこんなに零落して以後の、唯一の自慢藝であつたのだ。

上になつたり下になつたりして、暫く相手になつてゐた蝙蝠は何時か飛び去つて了つたが、父は尙盛んに空に向つて獨りで棒を使つてゐる。其のうち日は段々暮れ、夕月の光が一杯にそこらを浸して来た。其の月影の下で、磨いた檜の棒が、稻妻のやうにきら／＼と光る。母はほ／＼笑みながらちつと見て居た。私は強い豪い父だと思ふと同時に、何だか其の猛烈な勢が、幼心に物凄くて、慈愛の父といふ感じと調和しない、荒んだやうな氣持を覺えた。

父はやがて棒の手を収めて、汗を拭きき小川の縁へ降つて行く其のあとをぼんやり見送つてゐると、遙かの筋向うに二軒并んで立つた農家の前で、据風呂の火の赤く燃え立つのが見えた。二人の弟は其のときもう母と一緒に蚊帳の中に這入つて居た。

今から考へると、父はあの時、心に佐々木蔵柳の燕返しや、寶藏院の水月の槍の傳説などを繰り返して居たのだらう。其の父が故郷で不慮の死を遂げてから、今年七七年である。



權威の無い者が權威あるものの口眞似をする  
と誰れかが言つたが、實際、人には其の人みづからの權威の充實する限度がある。其の限度以内に於ては、各個人が皆自家の權威を有する譯だ。其の限度とは事實といふ事、實行といふ事に外ならない。殊に人生觀上の問題などに關しては、自ら行つてゐない言説を千萬積み重ねても、何の役に立つべきか。

(「聲がきしより」)